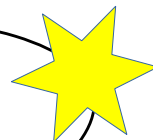


千里シリーズ2022

30年ぶり飛来?
島裕二彗星 天に輝く!!



杉原陽一（レギュラーシーズン優勝）

V S

島裕二（シーズン2位で選出）

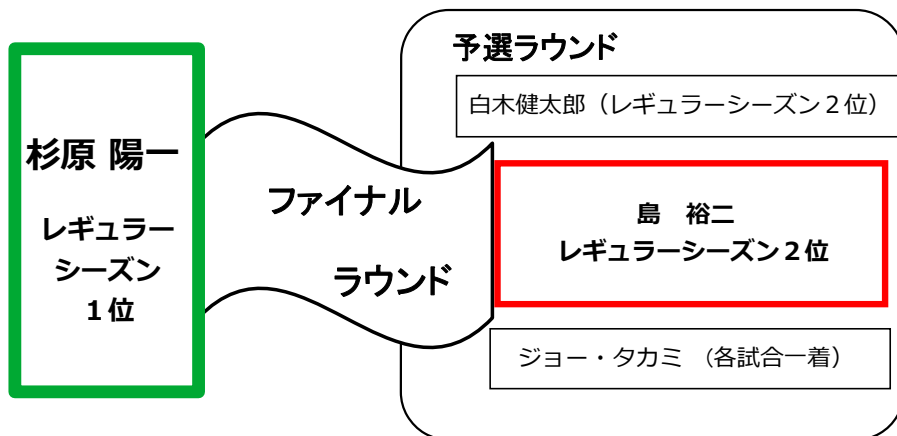
3年目となるコロナ禍をものともせず2022年WBF千里シリーズは11月13日、VEGAボウル曽根で開催された。

レギュラーシーズンを代表して登場するのは杉原選手。千里シリーズは過去9回出場のうち7勝と、圧倒的な勝率を誇る。一方で統計的にシーズン王者は圧倒的不利というアノマリーもあり、これを払拭できるか。

予選ラウンドを勝ち抜いたのは、フタバの丘で修行を積み、成果が現れてきた島裕二選手である。島裕二選手は以前WBFが前後期制で実施されていた時期に、唯一無二である前後期制覇を成し遂げた実績がある。それから雌伏30年！再び千里シリーズの舞台に立つ。

二人のハンデ差は46。杉原選手が得意のストライクラッシュでその差を詰めていくのが早いか、島裕二選手がマークを重ね杉原選手の追跡を振り切れるか、ほぼ46ピン差を10フレームで詰める鬼ごっこが今始まる！

【構成：fuchinkan】



2022 WBF Championship “Senri-Series”

●予選ラウンド

島裕二選手ワイルドカードからファイナル進出！

まずはレギュラーシーズン制覇の杉原選手のファイナルラウンドの対戦相手を決める予選ラウンドである。

白木選手（シーズン2着）、島裕二選手（シーズン2着）、ジョー・タカミ選手（第2戦1着）の3名がエントリーし、2ゲーム制の試合が行われた。

この試合のためにわざわざ東京より帰阪の白木選手が、1ゲーム目から飛ばす。スプリット1つ以外はすべてマークで埋める上々の立ち上がり。しかしダブルが出なかったこと、マイナスハンデ31が大きいのしかかり、競技点は147点だった。残る二人は凡庸なスコア。しかし島裕二選手がハンデを生かし、競技点153点で暫定首位を確保した。

勝負の2ゲーム目、白木選手は好調ながらストライクが出ない。1フレから9ピン（残1ピン）-スペアが5フレーム続く胃が痛くなるような展開。

一方で島裕二選手は、コントロールが定まりだしマークが増えてきた。

後半は白木選手がついに根負け、9ピン-オープンが3フレーム連続し、ジ・エンド。ジョー選手は、2ゲーム目に入ってスプリットの波にのまれ、調子が上がらないまま撃沈。淡々と取れるマークを取った島裕二選手が予選ラウンドを制した。

前述のように島裕二選手は30年前ぶりの千里シリーズ出場である。ファイナルラウンド出場という意味では、前期優勝の1991年（第3回千里シリーズ）以来31年ぶりである。

選手名	Gm	優P	入賞	得点	1	F	2	F	3	F	4	F	5	F	6	F	7	F	8	F	9	F	10	F	
ジョー・タカミ	1	0		114>>147	6	/	3	5	7	/	7	2	6	/	7	1	9	-	6	2	6	/	6	3	
白木建太郎	1	0	3着	178>>147	8	/	7	/	9	/	*		s8	-	*		8	/	7	/	*		9	/	9
島 裕二	1	0		111>>153	9	-	*		9	/	7	1	s7	-	*		7	-	6	2	9	-	7	2	
ジョー・タカミ	2	0	2着	132>>165	s6	-	6	/	*		s7	1	1	/	7	/	s8	1	s8	-	7	/	9	-	
白木建太郎	2	0		149>>118	9	/	9	/	9	/	9	/	9	/	9	-	9	-	9	-	s8	1	*	8	-
島 裕二	2	0	1着	143>>185	7	/	6	2	5	/	8	/	9	-	6	/	9	-	9	/	7	2	6	/	9

※ 島裕二選手がファイナルステージ進出

◆ファイナルラウンド第1戦◆

杉 原 選 手 鎧 袖 一 触 で 先 勝 ！

千里シリーズ出場 9 回、うち優勝 7 回と圧倒的な勝負強さを誇る杉原選手、対する予選ラウンドから勝ち上がってきた島裕二選手は、30 年ぶりの 3 回目の出場（うち 1 回は前後期制覇のため千里シリーズはなし）。杉原選手の今期ハンデは - 4、対して島裕二選手は 4 2、その差は 4 6 もあり、46 ピン差をもって先行する島裕二選手を、杉原選手が追いかける鬼ごっこと言えよう。しかし 1 0 フレームという制限内で 4 6 ピンもの差を詰めるのは容易ではない。1 0 ピン差を詰めるには、島選手がノーマーク時に杉原選手がマークすることが必要で、島選手がマークを取るとなると、杉原選手はダブルが必要になる。このパターンが 1 ゲームで 5 回以上必要なのだ。島選手がこのアドバンテージを活かすためには、ゲーム前半でいくつかマークを取り、杉原選手にプレッシャーをかけること、逆に杉原選手は、早々にストライクを手がかりにダブル・ターキーとストライクを重ねていきたいところだ。

												
杉原陽一 (シーズン優勝)	6 2	9 /	8 /	*	8 /	s8 1	*	9 /	*	9 / *		-4
	8	26	46	66	84	93	113	133	153	173		169
ハンデ込み 得点差⇒	↓ 47	↓ 38	↓ 26	↓ 15	↓ 16	↓ 17	↓ 4	↑ 7	↑ 10	↑ 21	1 勝	HDCP 競技点
島裕二 (シーズン2位)	6 3	8 1	7 1	s8 1	7 /	9 /	G 7	s7 2	9 /	s7 2		42
	9	18	26	35	54	64	71	80	97	106		148
												

さて注目の第 1 戦、1 フレはともにオープンでスタートしたものの、2 フレからは好対照となった。杉原選手は 4 連続でマーク、6 フレはスプリットで小休止したものの、残りをストライク・スベアを交互に出し続けフィニッシュ。一方、島選手はボールが右方向へ出し続けるなどコントロールが定まらずオープンを連発。

杉原選手は第 7 フレームでハンデ差をほぼ追いつき、最終的に 21 ピン差をつけて、第 1 ゲームを先取した。

◆ファイナルラウンド第2戦◆

たかが1ピン、されど1ピン 島裕二選手逆転でタイに！

												
杉原陽一 (シーズン優勝)	9 /	s7 2	s8 -	*	*	*	9 /	9 /	s8 -	s7 1		-4
	17	26	34	64	93	113	132	150	158	166		162
ハンデ込み 得点差⇒	↓46	↓44	↓45	↓24	↓13	↓1	↑1	↑12	↑11	↓1	2勝	HDCP 競技点
島裕二 (シーズン2位)	7 /	7-	s7 2	9-	9 /	8-	*	6 1	9-	* 8 /		42
	17	24	33	42	60	68	85	92	101	121		163
												

第2ゲームは、1フレはともにスベア、2フレ3フレはともにオープンと差が縮まらない展開。しかし4フレからついに杉原選手が本領のストライク・ラッシュ！ターキーで差を一気に縮め、その後も9スペ2つで島選手を突き放した。8フレーム時点で杉原選手が1フレあまりリードしていて、第1戦に続き連取かと思われた。

しかし第9フレーム、杉原選手は痛恨のスネークアイ（7・10ピン残り）。スネークアイはリカバーが不可能な残ピンとして最も恐るべき結果である。ボウラーとしてできることは、2ピンのうちどちらかを倒し1ピンを得ることである。実はこのゲーム、杉原選手は第3フレームでもスネークアイに見舞われている。そしてどうしたことが、ともに第2投でスルーとなっている。もちろん気落ちて気が抜けたわけではない。しかし結果として取れるはずの1ピンを2度取り損ねたことが、このゲームの勝敗を逆転させる要因となった。

杉原選手11ピンリードで迎えた第10フレーム。先に投げた杉原選手は、このゲーム4つめとなるスプリット。カバーを図りぎりぎりを狙ったボールは思惑を外れ、2ピンを残した。この時点で杉原選手のリードは19ピン。後を投げる島選手にとって逆転をするためには、第1投のマークは必須である。スベアなら第3投がストライクで逆転、第1投がストライクなら残り2投合計が10ピンで逆転という状況である。結果は…第1投で見事にストライク。これまで2つしか出ていなかったストライクをここで出すとはなにか宿命的なものを感じる。そして第2投は…8ピンである。この時点でまだ1ピンのビハインド。そして最後の1投…見事に2ピンともクリアし、1ピン差で第2ゲームの勝利を手にした。

ほぼほぼ勝利を手中にしていた杉原選手は、スプリット4つ以外はすべて高得点マークをしており、運

がなかったと言える。しかし派手なストライクや10ピンスペアなど魅せる場面の中に、スネークアイ2ピン残しや、10フレの3ピン中2ピン残しなど、らしくないプレーも散見しており、なにか異変が生じていたのかもしれない。兎にも角にもこの第2ゲームの終盤が、今年の千里シリーズのターニング・ポイントになったことは間違いない。

◆ファイナルラウンド第3戦◆

島 選 手 終 盤 に ブ ー ス ト で 連 勝											
杉原陽一 (シーズン優勝)											-4
	15	23	33	41	61	88	108	125	134	159	155
ハンデ込み 得点差⇒	↓39	↓51	↓60	↓61	↓49	↓30	↓17	↓20	↓31	↓23 3勝	HDCP 競技点
島裕二 (シーズン2位)											42
	8	28	47	56	64	72	79	99	119	136	178

第2ゲームまさかの逆転負けの杉原選手、第3ゲームも1フレからスプリットのスタートとなったが、しっかりカバーしギャラリーを安心させる。しかしその後の第2フレの第1投で5ピン残し、カバーもできず。第1ゲーム第1フレーム以来のオープン(WBFルール)となった。そしてなんと第4フレームではガター。いよいよ異変が明らかな形になってきたのか。

一方の島選手はというと、こちらもまったく波に乗れない。第2ゲーム終盤の集中力はどこに行ったのか、第1ゲームから続くボールが右方向へ流れる投球が続き、4・5・6・7フレと連続オープン。

勝利の女神が、両者に微笑みかけるのをためらっているかのようである。

さて、島選手が調子が上がらない中、杉原選手は5・6フレをダブルで復調。その後10フレでもダブルを出し、後半だけで100点近くを得点した。異変をリカバーし、ゲームの流れを取り戻すかに見えた。

しかし。このゲームでもゲームを決めたのは島選手の終盤ブースト！8フレからは人が変わったようにマークを連発。杉原選手の猛追からの逃げ切りに成功した。杉原選手は相手がマークを重ねる以上にストライクを重ねなければならない。ハンデ差のある戦いでは、これはどうしようもない部分である。一方の島選手は、終盤まで死んだふりをして油断させておいて、後半にまくるという展開を戦略的にしているのだとすれば、これは思わぬ試合巧者である。

◆ファイナルラウンド第4戦◆

千里シリーズ絶対王者の杉原もアノマリーには勝てず？

島裕二 30 年ぶり千里シリーズ制覇！

												
杉原陽一 (シーズン優勝)	9ー	s4 4	s8 1	s6 2	7 /	9ー	*	5 4	*	s6 2		-4
	9	17	26	34	53	62	81	90	108	116		112
ハンデ込み 得点差→	↓46	↓58	↓69	↓80	↓70	↓69	↓59	↓66	↓65	↓70	3勝	HDCP 競技点
島裕二 (シーズン2位)	3 6	8 /	*	6 /	9ー	5 3	7 2	6 /	6 /	7 / 3		42
	9	29	49	68	77	85	94	110	127	140		182
												

第4ゲームは、島選手が第3ゲーム終盤からの好調をキープ。2・3・4フレと連続マークで、勝負を決める3勝目の獲得を図る。ストライクで差を縮めたい杉原選手だが、2フレは④（6本残りのスプリット）という稀なピンの割れ方に遭遇、次の3フレでも4フレでもスプリット。まさかの3連続スプリットではさすがに心が折れたか。

中盤で島選手が足踏みする間も、杉原選手はストライクは出るものの、間をノーマークが埋めるという歯がゆい展開。そして最終10フレームでビッグ4まで飛び出すにいたっては投了致し方なし。

一方、島選手の終盤ブーストはこのゲームでも機能全開！8フレのガター後のお茶目スペアを皮切りに、9・10フレと3連続スペアで締め、最終ゲームはハンデを一度も縮められることなく逃げ切った。

島裕二選手の千里シリーズ制覇は2度目（1度目は30年前の前後期制覇）。千里シリーズで投げ合っのシリーズ制覇は初である。

対する杉原選手は、「予選ラウンド選出者が千里シリーズを制する」というアノマリーを、自らの勝負強さで打ち消したかったところだった。しかし、ハンデ差を縮めるはずのストライクが連発できず、それ以上にスプリット禍に巻き込まれる形で千里シリーズ3敗目となった。

激闘を終えて…

杉原陽一 1(●○○○)3 島裕二



今年も普通に勝つつもりだったが
杉原選手

ちょっと千里シリーズ制覇に馴れすぎてしまっ
て油断したかな。というのは冗談として、
今回の敗因はスプリット。

だがスプリット以上にストライクを重ねれば
いいだけの話だ。来シーズンは、精度と
破壊力を兼ね備えたプレーヤーとして、再
びこの場所に立つつもりだ。

シリーズ制覇の島裕二選手

ここ数年、城戸さんとフタバの丘で修行して
きた成果が少しだけ形になって現れたシー
ズンだった。これからもっともっと進化する
つもりだ。しかし今年千里シリーズも制覇
してしまっは、来年は何を目標にしたらよ
いのかな。

まあ30年ほど連続して優勝してみましょ
うか。ふははは！



千里シリーズ過去の戦績

	1989	松本誠司	4(○○○●○)	1	松本昌士	
	1990	奥山満夫	4(●●●○○○○)	3	下永義久	
	1991	松本誠司	4(○○●○○)	1	島裕二	
※1	1992	松本誠司	4(○○○○)	0	島裕二	
	1993	松本誠司	4(○○○○)	0	田中寿美子	
	1994	松本誠司	4(●○●○○○)	2	島和男	
	1995	白木建太郎	4(●○○○○)	1	田中久	
	1996	野村正明	4(○○●●△○●○)	3	松本誠司	
	1997	杉原陽一	4(○○○○)	0	松本香代	
	1998	松本誠司	4(○●○●○○)	2	白木建太郎	
	1999	松本誠司	4(○○○○)	0	杉原陽一	
	2000	白木建太郎	4(○○○○)	0	岩田修一	
	2001	杉原陽一	4(○●●○●○○)	3	ロバート・K	
	2002	白木建太郎	4(●●○○○●○)	3	松本誠司	
※2	2003	松本昌士	3(○●○○)	1	松本誠司	◆
	2004	◆ 白木建太郎	3(○●●○△○)	2	松本昌士	
	2005	松本昌士	3(○○○)	0	白木建太郎	◆
	2006	岩田修一	3(●●○○○)	2	松本誠司	◆
	2007	◆ 杉原陽一	3(○●○●○)	2	奥山満夫	
	2008	奥山満夫	3(○●○○)	1	島和男.com	◆
	2009	◆ 杉原陽一	3(●○○○)	1	奥山満夫	
	2010	白木建太郎	3(○○●○)	1	杉原陽一	◆
	2011	◆ 松本誠司	3(○○○)	0	藤原聡	
	2012	馬場毅	3(●○●○○)	2	白木建太郎	◆
	2013	杉原陽一	3(○●○○)	1	馬場毅	◆
	2014	杉原陽一	3(○●●○△○)	2	馬場毅	◆
	2015	城戸秀行	3(○○○)	0	白木建太郎	◆
	2016	杉原陽一	3(●○○○)	1	松本誠司	◆
	2017	◆ 島和男.com	3(●○○●○)	2	ジョー・タカミ	
	2018	田中宏典	3(○●○○)	1	白木建太郎	◆
	2019	白木建太郎	3(○●○●○)	2	ジョー・タカミ	◆
	2020	松本誠司	3(○●●○○)	2	田中宏典	◆
	2021	城戸秀行	3(○○○)	0	白木建太郎	◆
	2022	島裕二	3(●○○○)	1	杉原陽一	◆

※1 島裕二が前後期制覇をしているため、総合優勝は島裕二と記録。
特別企画の「千里G1クライマックス」として開催。

※2 2003年以降、千里シリーズの実施方式が変更。3勝先取で優勝。
◆はレギュラーシーズン優勝